自治体維新

首長インタビュー

岩手県知事

達増　拓也 氏

たっそ・たくや　1964年岩手県生まれ。88年東大法卒、外務省入省。米国留学、大臣官房総務課課長補佐などを経て、96年衆議院議員に初当選。連続4期の任期中、予算委員、憲法調査会委員、財務金融委員、経済産業委員・理事などを歴任。07年の岩手県知事選で圧勝、11年9月から2期目。県内の子どもたちに「好きなものを増やそう」と提案し、自らも「マンガやサブカルチャーだけでなく源氏物語やクラシック音楽などにも親しんでいる」という。

震災1000日、あまちゃん効果も逃さず

東日本大震災から1000日余り。岩手県の達増拓也知事は今年度を「復興加速年」と位置付け、当初の応急対策から本腰を入れた街づくりへとかじを切り始めた。国民の目をひきつけた「あまちゃん」や、世界中の科学者の関心を集めた最先端実験施設の建設候補地一本化などを追い風に、真の復興をどこまで押し進めることができるか。知事職2期目を折り返し、その手腕への注目度は内外で一段と高まっている。

長期スパンでの復興、プロセスも豊かに

岩手県知事として1期目の総仕上げの時期だった。2011年3月11日、東日本大震災。執務室で「来るべきものが来た」と直感したが、被害はその直感をはるかにしのぐものだった。県内の死者・行方不明者約6200人、倒壊家屋約2万5000棟。以来「復興」が最大のテーマとなった。

東日本大震災から2年9カ月たつが、改めて大きな災害だったと思っている。昨年米国を襲ったハリケーンや今年のフィリピン台風など大規模災害が続いているが、犠牲者の数でみると東日本大震災が飛びぬけている。この「犠牲者の多さ」がすべての原点だ。犠牲になられた方一人ひとりのふるさとへの思いを忘れず、それを引き継いで、新しい街づくりをしていかなければならない。

復興は12年までに比べて多くの分野で加速している。当初なかなか進まなかったがれき処理は目標の「14年3月までに完了」の達成にメドがついた。三陸の主要産業である水産業も、アワビやウニの増殖場の本格復旧が1年前倒しで進んでいるところもある。一部運休中の三陸鉄道も予定通り14年4月に全面復旧する見通しだ。

ただ県民の意識調査を見ると、12年は「復興している」と感じる県民が増え続けたが、ここにきて足踏み状態になっている。これは、当初は応急処置的な事業も多く「復興」が実感できていたも

禁複製・無断転載

のの、最近は本格復興に向けた準備作業、例えば街づくりの計画、測量、設計、用地交渉など目に見えにくい地味な仕事が増えてきたことが一因だろう。本物の復興がどのように進むのか、情報を共有することの重要性が増している。そもそも高台移転や街の区画整理は何年もかかる事業だ。県は８年計画を立てている。そういう中長期的スパンで見れば、以前より安全で豊かな街ができるという将来像さえしっかり見えていれば、気持ちも前向きになれるだろうと思う。

復興のプロセスそのものを豊かにしていく発想も重要だ。ある意味、復興はイコール自治と言える。自治とは住民個々の生活を向上させること。そこには切り捨てや取りこぼしがあってはならない。復興も同じだ。一人の取りこぼしもなく全員が復興しなければならない。復興を、単に先に行くための手段としてとらえるのではなく、みなで力を合わせて、そのプロセス自体を豊かなものにしていく発想が重要だ。そうした意味で若者や女性の力に期待している。「後生おそるべし」とは若者に対する孔子の言葉だが、若者や女性には私の想像できないようなことを考え、行動していく力があると思う。そこに期待したい。ハード面の復興はカチッとした計画を立てて進めていく必要があるが、一方で、生活支援などの分野では、例えば「AKBが来た」などのサプライズがあると復興がより豊かになっていく。今年の夏には１人の女子中学生の手紙がきっかけで釜石に渋谷109が来た。あれなど、まさにサプライズだ。

復興を加速させるには課題も多い。中でも大きな焦点の１つである用地取得に関しては、国に特別措置法の制定を働きかけている。街づくりや防潮堤建設には用地取得が欠かせないが、山の上や海岸などには長期間相続登記手続きが行われていないなど、権利関係があいまいだったり複雑だったりする土地が多い。こうした土地を県や市町村が円滑・迅速に取得できるように、法的整備を是非お願いしたいと思っている。

また、国には予算の額の確保とその使い道の自由度の向上も引き続き求めたい。グループ補助金がもらえなかった中小企業に自治体として支援したくても財源がない。震災遺構も１市町村１カ所という縛りがある。もっと必要なところに迅速に予算を使えるように自由度を高めてほしい。

北海道・北東北知事サミットで宮古市田老地区を視察した際の達増知事（左から３人目）

あまちゃん終了後も全国でイベント続く

NHK総合テレビの「あまちゃん」がヒットし、今年７～８月に舞台となった久慈市の小袖海岸を訪れた観光客は前年同期の23倍に達した。このブームを来年にどうつなげるか。サブカル派知事の腕の見せどころでもある。

12年の大型キャンペーンで岩手の観光の基礎力は大いにアップした。その基盤の上に立ち、来年も内陸南部の「平泉」と沿岸北部の「あまちゃん関係」が岩手の観光をけん引してくれるだろう。このところ三陸のホテルが続々と営業を再開しており、被災地を訪れる教育旅行にも弾みがつく。

あまちゃんは、先日も関西でオフ会があった。私もメッセージと岩手の地酒「南部美人」を贈った。インターネット上に公開された寄せ書きには「岩手県民の皆さま、達増岩手県知事、応援ありがとうございます」「岩手いつか行きます」などと書いてある。盛岡でも「あまちゃんナイト」というイベントが開かれ、アイドル評論家の中森明夫氏が駆けつけてくれた。「あまロス（放映が終了した喪失感）を癒やすために久慈に行ってきました」というマンガを公開した人もいる。これら

禁複製・無断転載

はみな放映終了後の出来事だ。放映中には起きなかったことが今ドンドン起きている。このようにあまちゃんブームは続いていくと思うし、続くようにして行かなくちゃならない。「坊ちゃん」と言えば松山というように、「あまちゃん」と言えば久慈、岩手というイメージを永く残したい。

マンガの活用も若者を中心に食いつきがいい。例えば県が発行したマンガ「コミック岩手」は３万部売れた。岩手の魅力を岩手に縁のあるマンガ家さんたちに描いてもらった作品だが、自治体の出版物でこれだけ出るのも珍しいのではないか。

もともとは麻生太郎元総理がマンガミュージアムを作ろうとしたことにヒントを得た。クールジャパン的に言って「着眼点はいい」と思ったが、マンガはコンテンツだ。箱モノではなく、コンテンツそのものを事業化しようと考えた。

11月にはニコニコ動画に県の公式チャンネルを開設、ローカルタレントのふじポンさんと私が対談する月１回の生放送番組も始めた。復興の現状をダイレクトに発信し、震災記憶の風化を防ぐと同時に、全国の若者層の岩手に対する共感の拡大や岩手ファンの増大を目指す。

次世代加速器で北上山地が先端科学拠点に

未開の地の代名詞だった北上山地が宇宙誕生の謎に迫る次世代加速器「国際リニアコライダー（ILC）」の建設候補地に選ばれた。周回遅れのへき地から世界の最先端科学技術拠点へ一気に飛躍するチャンス到来だ。実現すれば、東北全体の復興にも一段と弾みがつく。

ILCは物理学者らが世界に１カ所だけ建設することを目指している実験施設。約31～50kmの地下トンネルに造った加速器の両端から電子と陽電子を発射し、ほぼ光速で衝突させて宇宙誕生（ビッグバン）直後の状態を再現する。国内では九州の脊振山地と東北の北上山地が候補地だったが、今夏、科学者の会議が北上山地に一本化した。欧米などに目立った誘致の動きはなく、日本政府が手を挙げれば建設が実現する可能性が高い。ただ建設費も巨額なため、日本学術会議は「２～３年かけて検討し、関係国とも予備交渉せよ」と国に提言、国もその線で動いている。地元としては、そのための調査作業に協力していく。せっかく高まった機運がしぼまないようにPR活動も継続する。建設に前向きな経済同友会など経済界との連携もさらに深めたい。

岩手県は戦後すぐに２つの大きな台風に襲われた。そこで県は北上川総合開発計画に着手。５つの大型ダムを造り、治水、発電、工業・農業用水の確保などを進めた。それにならえば、今は北上山地の一大総合開発に乗り出す格好だ。北上山地の東端の三陸を縦に貫く１本の道路と、北上山地をまたいで沿岸と内陸を結ぶ２本の道路の建設は着々と進んでいる。地域の壁として立ちふさがっていた北上山地が「交流の場」になり、やがてILCも建設されれば、かつて開発の障壁だった一帯が原動力へと180度転換する。そうなれば岩手はかなり強い。北上山地にはユネスコの無形文化遺産に指定された早池峰神楽など世界に誇れる伝統文化もある。遠野や岩泉、葛巻などの地域文化も世界に通用する。存分に生かしていきたい。

インタビュアーから▶▶

被災地で「風化」懸念が高まっている。東京五輪などの話題が膨らみ、被災地が忘れ去られるのではとの不安だ。発信力の重要性が改めて認識されている。ただ、今年の流行語大賞候補には「じぇじぇじぇ」のほか「あまロス」「二刀流」「ビッグダディ」など岩手県関連の言葉が多かったのも事実。まだまだ岩手の発信力は衰えていない。先日、世界遺産・平泉から出土した木片に描かれていた「鳥獣人物戯画」風のカエルの絵を模したマンガ・キャラクターが

「ケロ平（ひら）」と命名された**＝写真**。愛らしい新キャラクターに愛らしくかつ平泉らしい名前が付いた。これなども来年の岩手をPRする力強い援軍になってくれるのではないか。

（盛岡支局長　**増渕　稔**）

禁複製・無断転載